

CHUOH TRY+ANGLE

知っ得通信

2007年3月20日発行 編集・発行：中央教育研究所(株) 〒732-0811 広島市南区段原2-15-5 <http://www.chuoh-kyouiku.co.jp/>



感情の論理 vol.1 「アナログの論理」

今回からこのメルマガでお話をさせていただく、全国学習塾援護会（旧塾生獲得実践会）の森です。

私の専門は中小塾のマーケティングです。マーケティングと言うと、「意味がよく分からない」という方がいらっしゃいますが、それもそのはず、この言葉は使う人によって定義が違います。私は単純に「利益を生み出す手法」と訳しています。

これまで300を超える、会員塾さんの経営相談に応じてきた経験を通して、学習塾、特に中小塾が発展する法則を探ってきました。このメールセミナーでは、出来る限り具体的な実践例を紹介しながら、あなたの塾が発展するヒントを提供していきたいと考えています。よろしくお付き合いください。

さて、今回はイントロダクションとして、私が提唱している、マーケティング手法のコンセプトについてお話します。それは一言で言うと「感情の論理」です。「アナログの論理」と言い換えても良いでしょう。

人間の行動原理は、「天邪鬼(あまのじゃく)」に由来しています。例えば、日本が拡大発展(物不足)時代だった頃は、本来、商品さえ用意すれば売れる理屈です。ところがそんな時代には、「買って下さい」というセールス(売り込み)が有効でした。

逆に縮小均衡(物余り)に突入した今では、「売り込み」は最も嫌われる方法です。売り手が押せば押すほど、客は引いていきます。また、アナログ全盛だったネット黎明期は、「デジタル」というだけで持てはやされ、ヒッピー風(たとえば古い?)の学生起業家が、ネットビジネスで大成功したものです。

現在はデジタル全盛期です。すると、不思議なことに「アナログ」が重要な要素となってきました。ネットショッピングでも必ず、利用者のコメントと評価が紹介され、それが売り上げに大きく影響を与えています。

このように、時代の趨勢(すうせい)に迎合することなく、ある意味、逆を行くことの方が成功(発展)に結びつきます。これを「天邪鬼の法則」と言います。今、デジタル全盛期であり、情報過剰の時代だからこそ「感情の論理」が有効なのです。実際に、会員塾の中には5年で教室数を10倍(90教室)にした中堅塾、塾生7名(ひえ〜、廃業寸前)から120名にした個人塾など、多くの成功例があり、「感情の論理」の有効性を証明しています。昨年来、大手塾を中心とした合従連合が急速に進み、中小塾受難の時期を迎えています。

しかし、角度を変えてみると(天邪鬼の法則を当てはめると)、そこには中小塾にとって大きなチャンスが見え隠れしています。次回からは、中小塾ならではのマーケティング手法(感情の論理)について、具体的に解説します。キーワードは、「大手の強みは捨てる!」です。

大手と同じ土俵で戦っては勝てるはずがありません。相手が相撲で来るのなら、あなたはサッカーで対抗するのです。サッカーならば朝青龍にも勝てるかもしれないのですから…。

私は地域に大手塾とFC塾だけが生き残る姿は、業界にとっても日本の将来にとってもマイナスだと考えています。地場で生き活きと活動する中小・個人塾が、第3極を形成してこそ教育界の活性化が図れるのです。

私は全ての中小塾が生き残るべきだという綺麗事を言うつもりはありません。しかし、このメルマガを読んで学ぼうという、勉強熱心な「あなた」には、是非とも勝ち残っていただきたい。これからのメールセミナーが、そのお役に立てることを切に願っています。

今月の気になるハナシ

暖冬と地球温暖化

異常気象といわれると、大雨や日照不足、干ばつを思い浮かべます。気象庁では、「過去30年の気候に対して著しい偏りを示した天候」を異常気象と定義しています。では、毎年のように続く「暖冬」は異常気象ではないのでしょうか？

1. 「暖冬」は異常気象？

結論から先に述べましょう。毎年つづく「暖冬」は、『地球温暖化』によって引き起こされる異常気象なのです。では、『地球温暖化』は、なぜ起こっているのでしょうか？

私たち人間も呼吸することで排出する二酸化炭素 (CO₂) ですが、本来は草木が光合成に使用するためや、地球の熱を宇宙に逃がさないために必要な気体です。

しかし、地球全体の二酸化炭素濃度が増えたため、この「熱を逃がさない」という効果が、地球全体をビニールハウス（温室）のような状態にしています。そのため地球全体が太陽からの熱を、必要以上に溜めこんでしまっているのです。

熱を溜める＝温度が上がるわけですが、その結果、地球全体の平均気温が上昇します。このため日本も例外なく1年を通して気温が高くなっているのです。結果、気温が低い＝寒いはずの「冬」でさえ、あたたかくなっているわけです。最初に述べた気象庁の、異常気象に対する定義を用いると、例年通りの「暖冬」は、「異常気象」ではないことになります。

しかし、日本、そして地球の気温が上がっているのはどう考えても普通ではないし、自然現象でもありません。今わかっていることは、何もしなければ、この異常気象は永遠に続くということです。

もちろん、「温暖化」によって南極の氷が溶け、今日明日で日本が、海に沈むなんてことはありません。そのため、

「将来のために地球温暖化を止めよう！」なんていっていませんが、すでに『地球温暖化』は将来の問題ではなく、現在の問題になっています。

2. 来年度の入試への影響は？

前号でも述べましたが、受験では、その年にあった話題が題材になることがしばしばです。おそらく、今年の例年以上の「暖冬」は、来年の入試に影響を及ぼすでしょう。では、実際にどのような分野の問題が出題されるのでしょうか？

それは、地学（天気など気象に関する問題）や、いろいろな発電の方法といったエネルギー問題など、地球全体を視野に入れた問題が予想されます。

もちろん、今年は始まったばかりですから、他にどんな話題が起きるかわかりません。ただし、今年、昨年と、気象・環境に関する問題が、多く取り入れられていないことも事実です。そろそろ、気象と環境がポイントになりそうな気がしませんか？

『地球温暖化』が進むと、南極の氷がとけ、海面が上昇するというのは有名な話です。ちなみに、『温暖化』により世界で最初に沈む国は、南の小国「ツバル」といわれています。海拔2mのサンゴ礁でできた国土は、たった1度の大潮でも大打撃を被るそうです。

このように、『地球温暖化』の問題は、試験に関わるだけではありません。『温暖化』による被害とは想像しにくいものですが、現実には危機に直面しているところがあるのは、事実です。ひとりひとりが生活の中で、温暖化対策を実践する。そんな時代になっているのは間違いないのです。